日刊 動労千葉
1988.7.15
No. 2856
国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二(22)七二〇七

国鉄「分割・民営化」反対！三里塚二期工事阻止！

清算事業団のたたかいに恐怖する革マル鉄道労連

労働者の敵＝革マル鉄道労連を解体・一掃しよう！

二号にわたり、鉄道労連大会（六月二八～九日）の方針について暴露・断罪してきたが最終回の今号は、清算事業団の仲間に対する鉄道労連の方針について明らかにする。当局の作成した全くデタラメな「選別リスト」によって不採用となった五〇〇〇名の仲間の不屈のたたかいは、分割・民営化体制を根本から揺さぶる大きな社会問題となっている。だからこそ、日帝・竹下政権、ＪＲ当局、清算事業団当局、さらには動労革マル・鉄道労連が一体となり、清算事業団の闘いをつぶすために必死になっているのである。われわれは、動労革マル・鉄道労連の清算事業団労働者に対する反動的方針を断じて許さず、解体・一掃のために全国鉄労働者が総決起されることを訴える。

清算事業団の仲間を「ＪＲは採用するな」と方針決定

動労革マル・鉄道労連は、第三回大会において「清算事業団の再就職未決定者をＪＲは採用するな」という反動方針を決定した。

「私たちはＪＲを『闘いの場』と位置づけるなど破壊運動をおしすすめようとする人たちの採用は認めない」などとしているのである。

そしてまた、方針書以外にも「国鉄清算事業団に所属する再就職未定者の雇用促進に関する特別決議」なるものをわざわざ決議しているのである。

決議文のなかでは、「鉄道労連の組合員は『黒字』にするために懸命の努力をしてきた」「ＪＲ各社合計で二九六二三名（鉄道労連調査結果）の余力要員を抱えている」「鉄道労連は……進んで出向に応じた。……直営店や保険、旅行代理業などを希望し、頑張った。……若年退職で民間企業で働く道を求めていった」にもかかわらず、「国労は……『元職場』や『元職種』のみ希望し、広域採用については闘いの場として位置づけつつ取り組もうとしている」だから「雇用確保・促進を支援する条件は何ひとつ作り出しえない」といっているのである。

「元職場」「元職種」奪還の闘いこそ展望を切り拓く

つまり、動労革マル・鉄道労連は、清算事業団の仲間がＪＲに採用されたら、この間の首切り攻撃に「率先協力した鉄道労連の『努力』が水の泡になる」とばかりにわめいているのである。実際に、当局の攻撃の前にひざまずき、組織の上から下まで「自己保身」におちいり、「目先の利益」ばかり追求してきた鉄道労連が「広域採用」にしろ国労組合員がＪＲに採用されれば、内部の不満は高まり、組織的危機をまねくことに恐怖しているのである。

「特別決議」で「再就職未決定者の就職先が決定していないということは、国鉄改革が終っていないということ」と鉄道労連は言っているが、まさに彼らの危機のあらわれに他ならない。

さらに、方針書のなかで国労中央の「清算事業団職員の雇用を確保するために」という討議資料＝（七月二〇日よりの国労全国大会で最大の焦点になろうとしている「清算事業団の仲間に対する再就職方針」という屈服）を徹底的に非難し、国労中央の動揺をあざ笑っているのだ。

勝負はこれから

まさしく勝負はこれから。北海道地労委では清算事業団への振りわけリストが暴かれ、あまりのデタラメな個人調査リストの作成に関わった元助役・元動労役員などが労働者側の証人として証言がかちとられた。また、物販オルグの報告であったとおり、北海道・九州でたたかう清算事業団の仲間は、「十年戦争でこの不当な攻撃と闘う」ことを決意している。その反撃のたたかいが動労革マルへの怒り、憎しみへと向かっているのは当然である。

いまこそ、国鉄労働者の反撃で、動労革マル・鉄道労連を解体・一掃しよう！

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！